

群 教 セ	G01 - 04
	令元.272 集
	国語一高

高校国語科における、 的確に話したり聞いたりできる生徒の育成

—生徒によるルーブリックの作成、活用及び修正を学習活動として—

特別研修員 黒岩 芽生

I 研究テーマ設定の理由

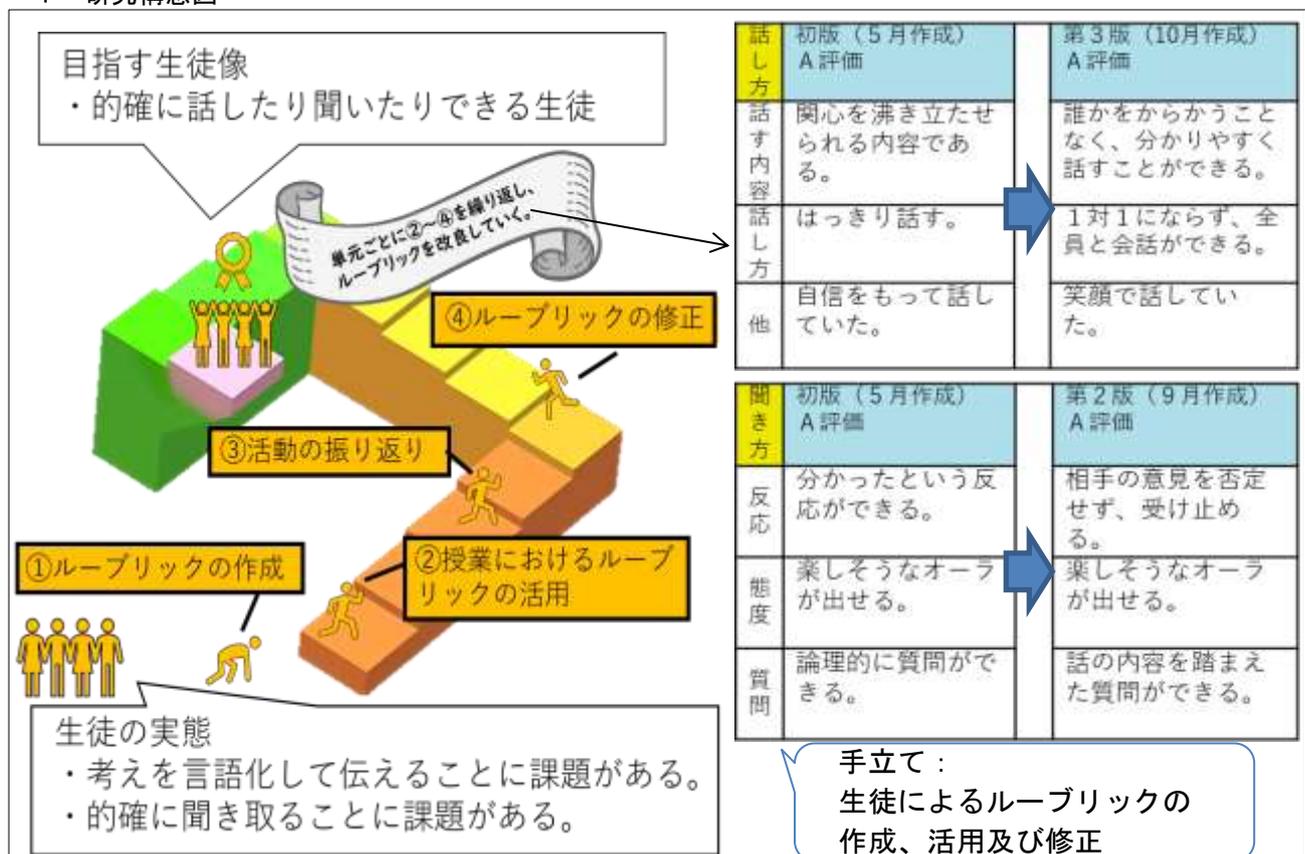
学習指導要領において、国語総合の科目における「話すこと・聞くこと」に関する指導は15～25時間を充てるよう設定されている。しかし、「読むこと」に偏重した授業が中心となっており、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域は十分な学習活動が行われていない場合も散見される。研究協力校（以下、協力校）も同様の課題を抱えている。

また、協力校の生徒は、自身の考えを言語化することが難しかったり、他人の話の要点を押さえて聞くことが苦手であったりなど、日常生活におけるコミュニケーションに少なからず困り感やつまづきを抱えている。そうした経験や特性から、積極的に意思疎通を図ろうという姿勢に乏しい。高校卒業後すぐに社会人として働き始める生徒も多い協力校において、自分の考えを的確に言語化して述べる力や、話の要点を聞き取る力を高校在学中に身に付けることは不可欠である。したがって、生徒の、的確に話したり聞いたり出来る力を育てる学習活動を授業内で十分に行う必要があると考えた。

上記の理由から、的確に話したり聞いたりできる力を身に付けるための手立てとして、生徒たち自身によるルーブリックの作成、活用及び修正を学習活動に取り入れた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

手立て1 ルーブリックの作成

協力校生徒の協働学習の様子や、インターネット配信されているグループディスカッション等の映像資料から「的確に話したり聞いたりする力」とはどのようなものか個々で考え、具体的な姿を挙げる。意見を共有した後、それらを身に付けるための行動目標を全体で考え、生徒の視点でABCの3段階の基準に振り分けさせる。

手立て2 ルーブリックの活用、活動の振り返り

ペア又はグループでスピーチする時間を設け、ルーブリックに沿って相手の話し方や聞き方を評価させる。評価をする際には評価の根拠を明確にして相手に伝えさせ、評価基準の共有を図るとともに無責任な評価をさせないよう指導する。単元の終わりには作品のまとめとなるテーマについてスピーチを行い、自分自身の話し方、聞き方をルーブリックに沿って自己評価し、活動を振り返る。また、スピーチの様子は録画し、ルーブリックを修正する際に活用する。

手立て3 ルーブリックの修正

他者評価と自己評価のずれを正すために、録画したビデオを視聴しながら、自分の話し方や聞き方はどのように受け取られているのかを客観的に見直す。その上で、何ができるようになったのか、次に設定すべき行動目標は何かを個人で考えたり、全体で共有したりしながらルーブリックの内容を更新させる。

手立て2と手立て3を繰り返しながら、的確に話したり聞いたりする力の習得を目指す。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 生徒たちは学習活動を通して、身に付けるべき技能を段階的に設定しながら「的確に話したり聞いたりする力」について考えを深め、力を付けることができた。初版のルーブリックでは、「聞き方」の評価における「質問」項目において他者評価、自己評価ともに比較的低い数値が見られたため、第2版に修正する際には「話の内容を踏まえた質問ができる」という、より具体的で基準が明確な内容に改めるなど、自身の実力に合わせた行動目標を立てたり、目標を達成するための見通しをもって、身に付けるべき技能を精選したりすることができた。また、同じ評価項目であるにもかかわらず、到達度が低下したのものがあるが（5ページ図4参照）、これは版を重ねるごとに適正な評価になっていること、生徒が求めるレベルが向上していることに起因すると考えられる。
- 活用及び修正のサイクルを二度経るうちに「質問は大事だなと思った。聞いている人の意見を理解することができるから」「話すことは人と人とのつながりを深める大事なものなんだなと思った」等、意識の変化が見取れる感想が9割の生徒から挙がった。このことから、ルーブリックを用いた言語活動は、話すことや聞くことへの苦手意識を払拭したり、会話を楽しむ姿勢を育んだりすることに有効であったと考える。

2 課題

- ルーブリックの作成、及び修正を行う際に協働学習の様子を記録した動画などを用いたことで、生徒は「肘をつかない」など、視覚的な課題にばかり着目してしまった。改善すべき点を挙げる際には、国語の授業で学ぶべき、身に付けるべきことは何か、という観点に絞って考えるよう促す必要がある。また、話の内容や論理性については映像から見取れる情報が少なく、学びを深めていくためにはスピーチや原稿などの資料が必要となる。達成すべき目標や生徒の特性に応じて支援の方法、活用する資料を変えていかなければならない。
- 話す内容の改善、主張をまとめる技術の向上は教員の支援無くしては難しく、生徒のみでは学びの深まりに限界があると感じている。教員の関わり方や促し方、また、評価の方法などを再検討する必要がある。

実践例

1 単元（題材）名 「よりよい話し方、聞き方を探究しよう（『羅生門』）」（第1学年・2学期）

2 本単元（題材）について

本単元ではスピーチ活動を行い、生徒の的確に話したり聞いたりする力を育成することを目指す。今回扱う教材は難解ではあるものの、老婆の言葉に翻弄されて揺れ動く下人の姿と自分を比べたり、老婆のエゴイスティックな理論について考えたりしながら活発に意見を述べるのが期待される作品である。

1学期までの活動で、多くの生徒は1対1であれば円滑にコミュニケーションを取ることができるようになった。また、「スピーチには根拠が大切である」「相手を意識した話し方、聞き方が大切である」ということに気付くことができた。一方、目指すべきイメージや評価基準にばらつきが見られるなどの課題もあり、論理的な話し方のモデルを提示し、映像資料を視聴させて評価基準の共有を図る必要があると感じた。

以上のことから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ルーブリックのA評価を目標とし、論理的に話したり聞いたりする力を身に付ける。 よりよい話し方、聞き方を探究し、それを身に付けるための手段を具体化する。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	・他者と積極的に関わり、自身の考えを伝えようしたり相手の考えを聞こうとしたりしている。 (観察)
	話す・聞く能力	・自身の考えを簡潔にまとめ、論理的に話している。 ・話し手の意見を間違いや過不足なく聞き取り、質問をして話を広げている。 (ワークシート、観察)
	言語についての知識・理解	・語句や表現に注意し、話し合う中で適切に使用している。 ・話の内容を踏まえて質問している。 (ワークシート、観察)
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時～ 2時	・映像資料を基に、論理的な話し方や望ましい聞き方について考える。 ・上記の学習活動を踏まえ、ルーブリックの内容を修正する。
課題追求	第3時～ 8時	・作品を読解し、その内容について考えたことや感じたことを話したり、他者から聞き取ったりし、ルーブリックに基づいて他者評価をする。
まとめ	第9時	・本単元のまとめとなるテーマについて自分の考えを話したり、相手の考えを聞き取ったりし、ルーブリックに基づいて他者評価をする。 ・話したり聞いたりする活動について振り返り、ルーブリックに基づいて自己評価をする。
	第10時 (本時)	・ルーブリックを修正する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全10時間計画の第10時に当たる。本時のねらいは「話したり聞いたりすることにおいて、身に付いた技能や自分たちがもつ課題を振り返る」「よりよい話し方、聞き方を探究し、それを身に付けるための手段を具体化する」ことである。これらを達成するための手立ては以下のとおりである。

手立てA

他者評価、自己評価を比較したり、スピーチの様子を記録したビデオを視聴したりして、身に付いた技能や自身が抱える課題について振り返る。

手立てB

何ができるようになったか、次に設定すべき行動目標は何かを考え、ルーブリックを修正する。

4 授業の実際

(1) 前時まで

生徒は単元の第1時～2時で1学期に作成したルーブリックの修正を行い、その内容を刷新している。また、毎授業の冒頭でスピーチ活動を行い、第2版のルーブリックに基づいて他者の話し方や聞き方の評価を行っている。前時には、「下人と友達になりたいか」「『羅生門』における一番の悪は何だったと思うか」「人間は自己中心的だ、と思った出来事について」「仕方なくする悪についてどう思うか」「悪の定義とは何か」「『羅生門』にサブタイトルを付けるとしたら」の六つのテーマから一つを選択し、各々の意見を3分間で述べたり意見交換をしたりする活動を行った。その後、第2版のルーブリックに即して自分自身の到達度を評価し、頑張った点や改善すべき点を挙げ、まとめとした。

(2) 導入

前時に記入した自己評価、他者評価のうち、A評価に到達したものがどの程度あったかをグラフ化し、生徒に提示した(図1、2)。

特に他者評価と自己評価に開きがあった、「話し方」の評価における「根拠が完璧であり、幼稚園児でも分かるくらい話がまとまっていた」「一方的ではなく、会話のように話す」の項目や、達成度の低かった、「聞き方」の評価における「(話を聞いているときに)楽しそうなオーラが出せる」の項目については、修正すべき重点項目として共通認識を図った。

(3) 展開

前時までの生徒のスピーチ活動を撮影したビデオを視聴し、生徒たちが「できるようになった方がよいこと」について考え、短冊に書いて黒板に貼って共有した。生徒から挙げた意見は「相手の目を見て話したり聞いたりする」「相手の話に興味をもち、話合いに参加する」「大きな声で話す」などの、聞き手、話し手としての態度を改善していく必要があるという考えが最も多く挙げた。また、「質問ができるようになる」という意見も多く、話を盛り上げたり深めたりするためには聞き手からのアプローチが重要であると認識している様子であった。

修正すべき重点項目として挙げた「話し方」における「一方的ではなく、会話のように話す」という項目では、三人以上のグループで会話をしているときに、仲のよい二人で盛り上がりすぎてしまい、他の生徒が会話に入れなくなるという点に問題があると考え、「全員と会話する」という内容に修正した。また、「根拠が完璧であり、幼稚園児でも分かるくらい話がまとまっていた」という項目を、第3版では「誰かをからかうことなく、分かりやすく話すことができる」「相手が納得できるように、根拠を伝える」というように内容を分割して、それぞれB評価、C評価に組み込み、スモールステップを踏んで技能を身に付けられるよう修正した。そのほか、「楽しそうなオーラが出せる」は「表情が生き生きしている」と具体性をもたせる形に修正した。第3版は第2版に比べ、生徒の現在の実力や、評価基準の具体性をより反映させたルーブリックに仕上がった(次ページ図3、4)。

生徒から挙げた意見は「話し方」が態度や表情に関するもの、「ハキハキしゃべる」など伝える工夫に関するものの2観点に集中した。「聞き方」も態度や表情に関するもの、質問に関するものの2観点に意見が集中した。第2版までのルーブリックは、「話し方」、「聞き方」それぞれ3観点9項目で構成されていたため、生徒に「3観点にするか、2観点にするか、どちらにしようか」と問い掛ける

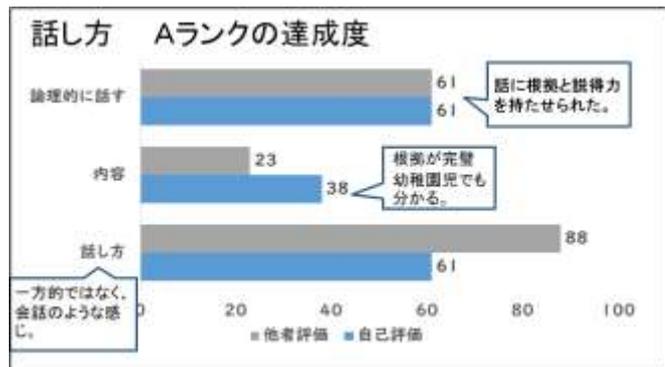


図1 他者評価、自己評価のグラフ(話し方)

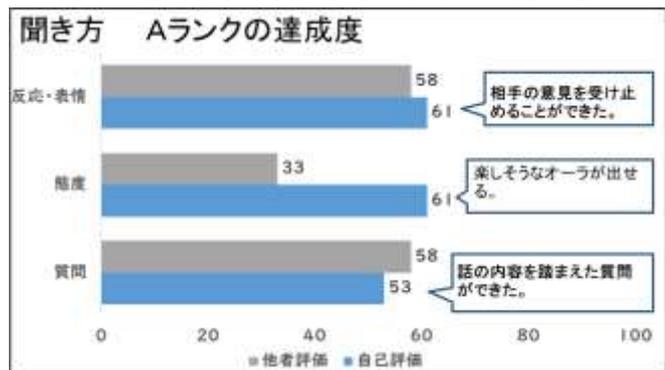


図2 他者評価、自己評価のグラフ(聞き方)

と「3観点で作りたい」という声が上がった。そのため、更に生徒とやり取りをしながら話し合いを深め、「話し方」については言葉遣いの観点、「聞き方」については身だしなみや聞く姿勢の観点を加えた。

観点	初版（5月作成） A評価	第2版（9月作成） A評価	第3版（10月作成） A評価
話す内容	関心を沸き立たせられる内容である。（到達度 65%）	根拠が完璧で、幼稚園児でも理解できるくらい分かりやすい。（到達度 23%）	誰かをからかうことなく、分かりやすく話すことができる。
話し方	はっきり話す。（到達度 90%）	一方的でなく、会話のように話す。（到達度 88%）	1対1にならず、全員と会話ができる。
その他	自信をもって話していた。（到達度 90%）	結論から話しており、説得力のある根拠を述べる事ができた。（到達度 61%）	笑顔で話していた。

図3 「話し方」ルーブリックの変化

観点	初版（5月作成） A評価	第2版（9月作成） A評価	第3版（10月作成） A評価
反応	分かったという反応ができる。（到達度 100%）	相手の意見を否定せず、受け止める。（到達度 58%）	表情が生き生きしている。
態度	楽しそうなオーラが出せる。（到達度 78%）	楽しそうなオーラが出せる。（到達度 33%）	表情が生き生きしている。話の内容を踏まえた質問ができる。
質問	論理的に質問ができる。（到達度 52%）	話の内容を踏まえた質問ができる。（到達度 58%）	
姿勢			猫背にならない。

図4 「聞き方」ルーブリックの変化

5 考察

図3、4のように初版のルーブリックには「自信をもって話す」など抽象的な項目が目立ったが、第3版のルーブリックは「全員と話ができていた」「根拠を伝えていた」などの具体的な項目で構成されたものになった。ルーブリックの活用を通して生徒が「よりよい話し方、聞き方」を探究できたものと考えられる。また、第2版のルーブリックでは話し方、聞き方のA評価達成率が6割程度にとどまったこともあり、修正後のルーブリックは第2版よりもやや容易な内容に変わっている。到達すべき理想の姿を共有しながら、そこに至るまでのステップを具体化し、課題解決に向けて計画する力を伸ばすことができたと考える。

本時の取組では、活動を客観的に振り返って「自分たちに足りないもの」を考え、ルーブリックを修正するという形式で行った。こうした進め方は、生徒が新たに課題を発見したり、自分たちの振る舞いを意識的に見て課題に気が付いたりできるため、視野を広げさせたい、意識付けをしたいというタイミングでは有効であると考えられる。一方、学びの深化には結び付きにくく、目的に応じて修正の仕方を変える必要があると感じた。特に今回、第2版のルーブリックと見比べながら修正していくという時間を設けなかったため、全く新しい観点や項目に刷新するような展開となった。動画を用いて活動を振り返ることも有効であるが、生徒たちが本単元で得た他者からの評価やコメントを踏まえ、ルーブリックを修正していくという活動を設けることも必要であると感じた。また、今回はABCの序列を付ける際に多数決を採用した。多数決は時間の短縮ができる一方、生徒によっては「A評価の項目よりも、私にとってはB評価の方が難しい」と感じることも想定される。時間が許すのであれば、「なぜ、この項目がA評価なのか」の根拠を明らかにさせてルーブリックを作成していけると、生徒の学びがより深まるのではないかと考える。